神奈川新聞　平成23年6月11日（土）【21面】

MADE in 川崎

手軽に「おいしい水」を

日本ベーシック

いわば「動く高度浄水処理場」。日本ベーシック（川崎市中原区）の自転車搭載型浄水装置「シクロクリーン」は、「あったらいいな」というアイデアを形にした同社の主力商品だ。

ペダルの動力でポンプを動かし、三つのフィルターを通して、ごみ、臭い、細菌を取り去り、「おいしい水」を作り出す。電気やガソリンは不要。足が届けば子どもでも使いこなせる。同社社長の勝浦雄一さん（63）は「動力は人間という究極の再生可能エネルギー。ちょっとしたスペースがあれば、いつでもどこでも飲料水ができる」。

河川やプールの汚れた水をくみ上げ、1分間に5、6リットル作り出せる。1時間に300リットル以上、およそ150人分の1日の飲料水を生み出すことが可能だ。東日本大震災後、災害時用の浄水器として脚光を浴び、10台分受注した。

思い浮かべるのは、被災地で稼働するシクロクリーンの姿だ。大人も子どもも飲料水づくりに参加し、人の役に立つ―。「気持ちがふさいでいる時こそ、生きる希望につながるはず」

自転車搭載型のアイデアは、勝浦さんが大手化学メーカーで家庭用浄水器の販売事業に関わっていた1999年ごろ、滋賀県内のメーカーから持ち込まれたという。95年の阪神大震災で、ライフラインの復旧が遅れ、水不足に悩む被災者の姿が目に焼き付いて離れなかった。

「いずれ家庭用は行き詰まるかもしれない。これだと思った」と勝浦さん。途上国では、汚水によって年間300万人の幼い子どもたちが命を落としている現実も、後押しした。だが、事業化されることなく退職を迎える。再就職先で再び、発案者から「手伝ってほしい」と言われ、2005年5月、会社を起こした。

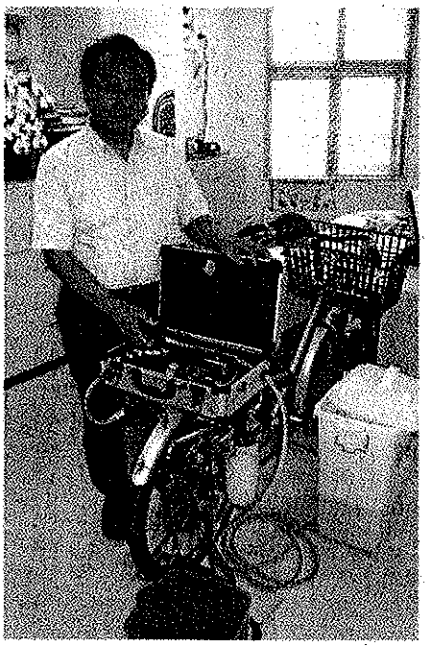
「商品を売り込むには、試してもらうのが一番」。オフィスは、東急東横線新丸子駅から徒歩1分の場所に構えた。ジンバブエの環境大臣も、この場所でペダルをこいだ。

06年には川崎市などの「起業家オーディション」に応募し各賞を受賞。「川崎ものづくりブランド」にも認定され、市の支援を受けながら知名度アップを図っている。

これまでの販売台数は200台程度。バングラデシュなどのアジア諸国やアフリカなどが中心だ。1台50万円を超える商品は、途上国では高価。先進国では、災害時にしか使う用途がないため「関心は高くても、すぐに受注まで結びつくものではない」（勝浦さん）。

必要とされている人たちに届けたい。だからこそ、課題はシンプルだ。「コストダウンです」

（佐藤　英仁）



自転車搭載型浄水装置の使い方を説明する勝浦社長＝中原区

◆日本ベーシック　川崎市中原区新丸子町。2005年5月設立。従業員2人。資本金は3500万円。自転車搭載型のほか、持ち運びに便利なスーツケース型（手回し式）や、家庭用の浄水器も販売。